バリアフリー2008で開催した公開事例検討会が盛況!!

全国福祉用具専門相談員協会（会長：山下一平氏）が、四月二十五日から三日間にわたって開催された西日本最大の総合福祉展「バリアフリー2008」のワークショップにおいて、「全員集合！全国の実力福祉用具専門相談員」と題した公開事例検討会を行ない、好評を博しました。

これは、講師が提示する具体的な事例に対して、福祉用具専門相談員が最適な福祉用具による援助方法をそれぞれ提案し、ケーススタディを行なうというもの。一日一回九十分のプログラムで、日大学保健医療学部教授の金沢善智氏、高齢者生活福祉研究所所長の加島守氏、福祉技術研究所株式会社代表の市川洌氏という、いずれも福祉用具関係の分野では著明な方々が講師を務められました。

事例検討の発表者は、事前の募集に応じられた十八名の福祉用具専門相談員の方々で、北海道や鹿児島から参加された方もおられました。

連日、大勢の来場者があり、用意した百名の席では間に合わず、追加の席を作らなくてはいけないほどの盛況ぶりでした。講師と発表者の事例検討に加えて、来場者からも多くの意見や質問が寄せられ、活気のある事例検討会となりました。

事例検討会の各プログラムの内容

「退院直後の脳出血による左片麻痺者の福祉用具導入」（四月二十五日）
講師：金沢善智氏

課題は「脳梗塞で左片麻痺となった方の退院後の福祉用具導入・住宅改修案と、適切な車いすの選定支援」。発表者からは排泄・入浴・屋外への移動などの具体的な場面を想定しながら、それぞれの知識・経験に基づく、様々な援助方法が提案されました。

金沢氏からは、「課題への対応は一つではなく、色々な方法がある」、「使用方法まできちんと教えて初めて福祉用具導入・住宅改修といえる」などの助言があり、専門相談員として持つべき基本的な心構えが示されました。また、「現場に行かないと解決すべき課題がみえてこない。教科書通りに進まないからこそ、様々なノウハウを蓄積した経験が大切」とし、専門相談員のスキルアップには、実践形式の研修が重要であることを強調されました。

「回復過程に合わせた福祉用具の適応」（四月二十六日）
講師：加島守氏

課題は「ギランバレー症候群で十カ月間入院した方の回復過程に合わせた福祉用具導入と住宅改修」を提案するもの。発表者は、利用者に関する情報収集能力、住環境整備にあたっての方針作成能力、商品等の提案能力、説明能力など、福祉用具専門相談員に必要なスキルを盛り込む形で提案を行ないました。退院時から半年後、一年後と、時間の経過により、その時々に適した福祉用具の提案がなされ、実際の事例を追体験するような形で進められました。

まとめとして加島氏は、「（例えば、退院するという時に）福祉用具専門相談員にとって必要な情報は、『ベッドや車いすを入れて下さい』といったものではなく、もっと幅広く入院中のADLや入院前の生活、身体機能などの情報」であり、「利用者に対する提案は一つではなく、複数の選択肢を用意できる能力も必要」と述べられました。

「福祉用具のプランニングと住宅改修」（四月二十七日）
講師：市川洌氏

課題は「脊柱管狭窄症を罹患している独居の方の事例」。「できるだけ他人の世話にならずに暮らしたい」という希望が叶えられるよう、移動や入浴、排泄等といった複数の課題に対して、発表者が持参した資料をもとにそれぞれ提案内容が発表されました。

市川氏は、「個々の条件を踏まえて、利用者にあった最適な福祉用具を考え、選定することで、その人の生活は飛躍的に向上する」として、福祉用具の選定にあたっての基本的な考えと、そのもたらす効果を強調。そして、最後に「より自分らしい生活をしていくための手段の一つとして、福祉用具をぜひ有効に使って欲しい」と強く訴えられました。

事例検討会発表者の感想

○我々の仕事は現場で一人になりがち。経験が違えば視点も異なるので参考になった。
○一つの事例に対して意見や考え方を出し合うような機会がこれまではなかった。他業者の方との意見交換は限られてくるので、こういった企画は本当にいい。
○ぜひとも社内でも研修の一環として取り入れていきたい。
○色々な案を聞かせていただき、新たな発見があり、勉強になった。実際の選定にあたっては、利用者のニーズをいかに聞き出すかが大事であり、そのためにはコミュニケーション能力のレベルアップも大切だと思った。
○専門相談員によって十人十色の解決方法があるのだと改めて感じた。問題点を解決するためには他の専門職とのチームアプローチが重要だと感じた。
○会場の皆様もメモを取られており、真剣に聞いてくれている方が多く、私たち専門相談員に対して期待等もあるのではないかと感じた。